カメラ探訪

文学の里

その2　三角西港

夏の日の夢　―ラフカディオ・ヘルン著―

明治二十六年夏、単身長崎に遊んだヘルンは洋風化された長崎の港町に幻滅し、逃げるようにして三角西港に上陸、「浦島屋」という宿屋に泊った。そこでの女中さんたちとの人間的なふれあい、海岸沿いの美しい町の家並、蒼い海に魅せられ「わざわざ、ここまで来た甲斐がありました」と歓喜の声をあげている。

わたしの ぼくの 郷土

虫追祭

新和町立小宮地小学校　六年　坂口さつき

私の住んでいる小宮地は、山に囲まれた平和で小さな町です。春から秋にかけて、いろいろな行事がありますが、その中で最も代表的なものが虫追祭です。この虫追祭は、江戸時代のはじめ頃できたそうです。

その頃、田植え時になると決って干ばつにおそわれ、水争いが絶えず、農民のくらしはとても苦しかったそうです。これを救うため、今の森下さん（森下国広さん農業、五十六歳）の十一代前の森下九郎兵衛という人の手で、工事が進められたのが大杉ため池だそうです。こうしてできた大杉ため池には、農民のきたいと、願いがこめられていたことを今でも感じることができるようです。

これで水の心配はなくなりましたが、いねを食いあらす害虫がたくさん出てきて、大変困ることが多かったそうです。この虫追祭も、森下さんの八代前にあたる先祖の方と、村の人々がいっしょになって始めたそうです。

虫追祭は、森下さんの庭先にある大杉ため池の記念ひの前で豊作をいのり、そこから四キロメートルはなれた松原まで、ほらをふき、たいこをたたき、ふえを鳴らし、ささおどりをしながらねり歩きます。

かねや、たいこの音や、ささの葉で虫をだんだん海の方へ追い出すためだそうです。

ところどころでは、今年の豊作を願うのりとがあげられます。部落の人たちは、これを待ちうけ、おどってくださった人や、神主さんにごちそうを用意していて、町中そうででいわいます。

この虫追祭は、先祖の多くの人々や、祖父や父がずっと受けついで今日までできたのです。私たちも、干ばつをふせぐ大きな大杉ため池に感謝するとともに、害虫に困らないようにという願いがこめられている、小宮地の代表的虫追祭を、町の文化い産として今後も受けついでいこうと考えています。